



Contents

- ・【巻頭エッセー】
“源泉”を見出すということ…図書館長 井上郷子 ●表紙
- ・Welcome to our Library ●2～3
- ・先輩からのメッセージ～新入生の皆さんへ～ ●4
- ・2018年度ばるらんど総目次 ●5
- ・【卒論報告】
デオダ・ド・セヴラックと地域主義…横屋藍 ●6～7
- ・Information ●8

Parlando

ばるらんど

「語りかけるように歌う」という意味の楽想記号です

No.302

【巻頭エッセー】 “源泉”を見出すということ 図書館長 井上郷子

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。新しい環境で、今しかできない学生生活を送られることを願います。

ブランクーシという人の名前を聞いたことがあるでしょうか。コンスタンティン・ブランクーシは20世紀を代表する彫刻家。1876年ルーマニアのホピツァという農村に生まれ、1957年パリで没しました。創作の拠点としたパリではエリック・サティと仲良しだったといいますが、彼が生きた時代背景を何となく想像できるかもしれません。

ブランクーシの彫刻作品のフォルムは究極までにシンプル、大理石やオーク材、石膏、ブロンズなどの素材感すらも感じさせないほどです。それ故、後のミニマルアートの先駆けであったとも言われます。例えば「無限柱」シリーズ。シンプルなユニットを繰り返し用いて構成されている柱。それはどこで切っても柱。無限の柱。例えば「空間の鳥」シリーズ。鳥が鳥である本質のみが残ったようなかたち。

興味深いことに、ブランクーシは同じタイトルの作品群を長い年月をかけて作り続けています。「無限柱」は19年間、「空間の鳥」はなんと28年かけています。自分の足元に穴を掘り続けるかのようです。（「無限柱」も「空間の鳥」も空へと向かう上昇のイメージがあるにもかかわらず・・・）実際、この年月は、ブランクーシが事物の本質を捉え要素を極限まで切り詰めていくという自身の表現様式（フォルム）を探求するのに費やした時間なのではないでしょうか。そして彼はいったい、どこに、どのようにして自身の創造の源泉を見出すに至ったのでしょうか。

このことについて、同じルーマニアの宗教学者/作家、ミルチャ・エリアーデは、短いがたいそう美しいテキスト「ランクーシと神話」の中で「内面化」と「深奥への探求(または沈潜)」という2つのキーワードを用いて語っています。要約しますと、ブランクーシがパリで前衛芸術家の作品やアフリカの始源的な造形世界に出会ったことが自身の内面へと向かわせた。向かったのは子供時代の、同時に想像の世界。そこで自分のルーツであるカルパチア農民の伝統の豊かさを発見する。しかしここでルーマニアやアフリカの民俗芸術の造形世界を模倣、再現することはなく、更にずっと深奥へと赴き内面化に専念する。そして太古の造形世界を養っていた諸力、源泉を見出すことによって彼独自の始源的なフォルムを得ることに達した・・・。

ブランクーシの才能の1つは、自分が創造できると感じた形態の真の源泉をどこで探せばよいかを知っていたということでしょう。彼はその源泉を見出し、そこに秘められた様々な力を自分のものとし、長い時間をかけて現実としての彫刻作品を作り続けていったのです。

私は今年度より図書館長を務めています。学生の皆さんが音楽や芸術を広く深く考え、より楽しむことができるようになるきっかけを提供し、それらを自身で内面化し、探求し、持続させていく支えとなることのできるような図書館でありたいと思っています。

（注）「ブランクーシと神話」ミルチャ・エリアーデ著 奥山倫明訳
『迷宮の試煉 エリアーデ 自身を語る』（作品社2009年）に付録として所収

●いのうえ さとこ 本学教授（器楽表現＜創作系ピアノ＞）